

FROM BLACK 2
～DS極道の過激な溺愛～

Satoi & Hazuki

桔梗 楓

Kaede Kikyo



エタニティ文庫

もくじ

フロム ブラック
FROM BLACK 2
～ド^{エス}S極道の過激な溺愛～

5

書き下ろし番外編

結婚式前日のいらぬ一言

347

フロム ブラック
FROM BLACK 2

～ド^{エス}S極道の過激な溺愛～

第一章

朝日がカーテンの隙間から差し込み、その眩しきで否応なく目が覚めてしまう。

「うー……」

しかし、脳が起きても身体がついていかない。なんとなくだるくて起き上がれず、私——椎名里衣はベッドの上で転がった。だって布団が気持ちいいんだもん。布団から出たくない。ごろごろしていたい。でも、仕事がある。お給料をもらっているからには、仕事はやらなくちゃいけない。

私は、二カ月ほど前から、とある興信所で事務員として働いている。

きっかけは、黒塗りの高級車との接触事故。当時、ブラック企業の営業として馬車馬のように働かされていた私は、疲労がピークに達していたらしい。運転していた社有車をうっかり、高級車にぶつけてしまったのだ。

しかもなんの因果か、相手はヤクザだった。提示されたのは、法外な慰謝料。私はそれを払い終えるまで、ヤクザである獅子島葉月が経営する興信所で事務員として働き、

彼の『趣味』につきあうことになったのだった。

お給料は雀の涙である上、そのほとんどを慰謝料として天引きされる。さらには、事務所のある建物に軟禁状態。もちろんはじめは嫌だったし、不自由がないと言ったら嘘になるけれど、今の私はこの日々がずっと続けばいいと思っている。

それは、葉月さんと両思いになれたから。彼の第一印象は変態ヤクザだったが、一緒に暮らすうちに彼の優しさを知り、気づけば好きになっていた。彼もまた、私が好きだと言ひ、慰謝料の請求を撤回してくれた。

心のよりどころができた私は幸福感に満たされ、今は高級車の正式な修理代を給料から天引きしてもらいつつ、働いている。……さて、布団でゴロゴロするのは、そろそろ終わりだ。起きて、仕事に行く準備をしなくてはならない。

うつ伏せになつて、もともとと身体を動かす。名残惜しいけれど、布団から出よう。そして顔を洗ってコーヒーを淹れて、身体も頭もしゃきつと目覚めさせよう。

ようやく私はムクツと起き上がった。そのままベッドから下りようとしたところまで……するとお腹のあたりに長い腕が絡んできた。

「どこに行くんですか？ 里衣」

「は、葉月さん、ぎゃー！」

ズルズルズル、とベッドに引きずり込まれる。腕の持ち主——葉月さんは、背中か

らびったりと私を抱きしめ、ベビードール越しに胸やお腹をやわやわ撫でてきた。毎朝恒例のセクハラである。

私の雇い主兼恋人の葉月さんは、『性調教』が趣味でセクハラが大好きという、紛うことなき変態なのだ。

「ひっ、あ、だめ。もう朝だから、朝ご飯を作らないと！」

「一回くらいしても、時間的には問題ないですよ」

「一回？ 一回って、何するの!？」

慌てて振り向く。すると葉月さんは、起き抜けにもかかわらず眼鏡をかけていた。そして、ニッコリと笑みを浮かべる。

「もちろんセックスですよ」

「セックス!? や、やだー! 朝は本当に勘弁して! これからお仕事だつてあるんだし、朝くらいはゆっくりさせてよ!」

「つれないことを言わないでくださいよ」

「ひっ……、あつ、首筋とか舐めないで。や……っ、胸もだめ!」

じたばたと暴れるが、彼はまったく動じない。それどころか、私の腕を背中側でまとめ、ぎゅっと握った。そしてもう片方の指でいやらしく乳首をつねり、私から官能を引き出そうと、捏ねくりまわす。

びくびくつと肩が震えてしまい、思わずぎゅつと目を瞑った。抗えない感覚に息が上がる。

「あ……ん、んっ……は、葉月さん……っ!」

非難の声を上げたつもりが、すっかり甘いものになっていた。こんな声色じゃ、全然嫌がつているようには聞こえない。

「可愛い声ですね。仕事なんて忘れて、快感に身を任せたらいいのに。里衣は真面目ですわね」

葉月さんはくすくすと笑い、ベビードールの前を結びポンをシュルリと解く。剥き出しになった私の肩に、ちゅ、と口づけた。

「まあ、そういうところがたまらなく好きなんですわ」

「ん……っ、はあ……っ!」

さらに彼の手が内股に向かってすると動いていき、薄地のショーツ越しにツツと秘所を辿る。

「っ、ん……! ああ……ん……っ!」

私は声を漏らしながら、葉月さんにまとめられている腕に力をこめる。なんとかして、彼を引きはがしたい。——が、耳を甘く噛まれ、ちろりと耳朶を舐められた私は、「あっ」と高い声を上げてしまった。

フ……と、葉月さんが耳元で低く笑う。

「力を抜いて、里衣」

「ふ、……っ、あ……！」

「愛していますよ、里衣」

「ん、ん……っ、やあ、そんなの、ずるい……っ」

耳元で甘く囁かないで。気持ちのいい言葉を言わないで。

抵抗感がなくなってしまう。葉月さんにすべてを任せたくなる。——すでに知っているあの快感を、味わいたくなる。私の官能が、葉月さんを望みだす。

「里衣」

快感を堪えるべく顔をしかめていると、葉月さんは私の手を解放し「こっちを向いて」と言った。私はしぶしぶ、ベッドの上で振り返る。そのとたん、葉月さんは唇を重ねてきた。

「ん……」

静かな部屋の中に、ちゅ、ちゅ、と唇を合わせる音だけがやけに響く。葉月さんは柔らかな部屋の中に、ちゅ、ちゅ、と唇を合わせる音だけがやけに響く。葉月さんは柔らかに食むように私の唇を啄み、優しく微笑んだ。

「今日は、里衣からもキスをしてください」

「えっ、私から？」

「はい。おはようのキスが欲しいです」

ニツコリしながら、大変困る要望をおっしゃる。こういうのも甘え上手って言うのかな。そんな風にねだられると、なんでも言うことを聞いてしまいなくなる。

彼の言う通りにするのが悔しい。でも、私はムツとしながら、葉月さんの薄い唇にキスをした。

ちゅ、と聞こえる甘い水音。自分が鳴らしているのだと思うと、たまらなく恥ずかしい。

ゆっくり唇を離すと「もっと」と言われた。仕方なくもう一度キスをする。

「フフ、里衣。ちゃんと舌も入れてくださいね」

「も、もう。恥ずかしいのに……」

「ええ、朝から照れる里衣は可愛くて、ずっと見ていたくなります」

至近距離で、葉月さんは幸せそうに囁く。やっぱり、彼は甘え上手だ。いや、単に私が葉月さんを好きになったから、彼のおねだりに弱くなっているだけなのかもしれない。

私は羞恥心を抑えて、葉月さんと唇を重ねた。そして、ゆっくりと自分の舌を彼の口の中に挿し込む。葉月さんの舌はとろりと熱かった。ドキドキしながら絡ませる。

「ふ……っ、ん、ん……あっ」

葉月さんの舌も、私の動きに合わせてるように動く。ねつとりと触れ合い、舌先を合わせて舐め合い、ちゆるつと舌を吸う。

その時、葉月さんの手がゆるゆると動き出した。ペビードールの中に大きな手が侵入し、私の小さな胸にやんわりと触れる。彼の手は温かく、胸の柔らかさを確かめるように手のひらで揉みしだくと、キュツと胸の頂を摘まんできた。

「っ、んん！ ああ……んっ」

キスでも手でも攻められて、快感が襲いかかってくる。私が身をよじって唇を離そうとすると「まだですよ」と囁かれた。

「里衣、キスをしてください」

「……はあ……っ、ん、じゃあ、へんなことしないでよ……っ！ ああ……っ、ん……っ」

「へんなことって、こういうことですか？」

葉月さんはクスクスと笑いながら、胸の頂をぎゅつと抓り上げ、くりくりと指先で擦る。

肩がビクンと震えた。彼に胸を弄られると、みるみるうちに力を失ってしまう。はあ、と熱息を吐いて、身体の内から湧き上がる官能を懸命に逃がした。

「これからもっと恥ずかしいことをするのに、乳首を弄ったくらいで顔を赤くするなん

て、里衣は可愛いですね」

ス、と布団の中で葉月さんの手が動く。私の脚の間に割り込み、彼の指先がツツと内股をなぞる。

「あ……っ、は、あ……っ」

「ほら、キスをして。唇を離したらいけませんよ」

「は、離したら、どうするの……?」

おそろおそろ聞くと、葉月さんは人差し指でくつと私の秘所を押しした。今、私が穿いているのは、大事なところに穴の空いた下着。その穴から、ぐりりと的確に秘芯を突いてくる。

「あっ、ああああ……ん！」

強すぎる刺激にビクビクと身体が震える。葉月さんが私の耳をべろりと舐めた。

「キスをやめたら、あなたの大好きなお仕置きをして差し上げますよ。お仕置きをされたいなら、わざとキスをやめるのもアリですね」

まるで挑発するかのように、耳元で囁く葉月さん。その低い声にずくんとお腹の奥がうずく。

「私の里衣は、いやらしいことをされるのが大好きですから……ね?」

「ふ……っ、……うう……っ」

葉月さんはこんなことを言って、私が抵抗するのを楽しんでいるのだ。

彼の言葉通りにキスをやめたら、まさしく私はいやらしいことをされたいと望む、はしたない子だということになる。だから、自ら唇を離すことができなくなってしまった。「ん……っ、葉月さんのイジワル……っ」

「ええ。私、里衣に意地悪をするのが大好きなんです」

趣味の悪いことをニコニコ肯定する葉月さん。本当に、口ではかなわない。

負けん気の強い私は、葉月さんをジッと睨みつけてから口づけた。そういえば、葉月さんはキスが好きなのだろうか。私達はとても頻繁にキスをしている気がする。

「んっ……っ」

ちゅ、と水音を立ててて啄み、舌を挿し込んだ。そしてぬちゅりと舌を絡ませ合う。

すると葉月さんは手をいやらしくうごめかせ、唇を重ねながら、指先で私の秘所を弄った。

「あ……っ、ふ、ん……っ！ は、あ……っ」

開かれた秘裂の内側を彼の指がなぞると、くちゅっ、とトロミのある水音が聞こえてくる。私の蜜口が潤っているのだ。

彼の愛撫とキスで、私が気持ちよくなっている証。葉月さんはくすりと笑うと、蜜で指先を濡らし、秘芯をぬるぬると擦る。

「……は……っ、あ、んん……っ！」

小刻みに震えていた身体が、ビクビクと大きくしなった。キスをしていると性感が強まって、官能の波に抗えなくなる。

それでも、キスをやめるのは悔しかった。お仕置きという言葉に少しドキドキしてしまう自分があるけど、彼の挑発に乗りたくない。はしたない女だなんて、思われたくない。

「あ……っ、ん、ふう……っ」

声を漏らしながらも、ちゅ、ちゅ、ちゅ、とキスをしていると、葉月さんが唇を離し、こらえきれないというように笑った。

「まったく、里衣はたまらない。必死にキスをしてきて……何がなんでも、快感に屈伏させたくありませんよ」

「ん……っ、は、あ……っ、ぜっ……っ、たい、葉月さんの……思い通りに、なんか……っ」
「睨んでくるのは、可愛いですね。そんな表情で見つめられると、酷く煽られてしまいます」

ぐちゅ、と人差し指が蜜口に挿し込まれる。かぎ状に曲がった指先が、ぐりぐりと膣内をこじ開けた。

「は、あああ……っ！」

ビクツと身体を震わせ、嬌声きようせいを上げる。彼はぬちゅつと指を抜くと、次は二本に増やして臍内へいに指を入れた。

「本当に壊したくなりますよ。壊れてほしくないのに、時々、とてつもなく壊れた里衣が見たくなる。……あなたは、可愛い。里衣……私だけの、里衣」

ちゅ、と葉月さんが唇を重ねてくる。私の歯列を舐め、ぐるりと舌を動かして舌を絡め取った。息もできないほどの、深い口づけ。

そして彼の指先が、グリグリと臍壁を擦る。にゆる、くちゅつ、とみだらな音を立てた。

「んっ、んっ、あっ……っ！ ン、は、……あ、あー！」

二本の指を広げてぬちゅぬちゅと出し入れされると、蜜口いやくちうが否応なく広がる。指で深くまで突かれ、ぐちゅぐちゅと臍奥じゅうりんを蹂躪された。

「あ……っ、んんっ、……はっ、あ、葉月……さんっ」

「ほら、里衣。キスしながら、性交をしましょうね」

ちゅうつと唇に吸いつかれ、一際深い口づけがはじまる。私の唇の端から、唾液が一筋こぼれた。

「……ふ……っ、ん……あ……っ」

唇を重ねていると、下腹部のほうでこそこそと音がする。やがて、脚を開かれたかと

思ったら、ヌルリとして熱いものが、私の秘所にあてがわれた。

それが葉月さんの性器だと気づくと、たまらなく恥ずかしい。

彼が腰を進めると、ぐりりと蜜口にそれをねじこまれる。指よりもずっと太くて、熱くて、硬いもの。

「あああっ！ はあ……んっ！」

質感のレベルは指と全然違う。圧倒的な圧迫感に、思わず彼の唇を離し、口をばくばくと開けて酸素を求める。

だけど、葉月さんはそれすら許してくれない。再び唇を重ね、濃厚に舌を絡ませながら、肉杭を容赦なく打ちつけてきた。

「あっ、んー……ッ！ は……、はあ、……ん……あっ……」

その時、唇が離れたかと思ったら、シャツという音がする。葉月さんが身体を起こし、カーテンを大きく引いたのだ。

「え……!? あっ、やあ……っ！」

「朝日に照らされて、里衣のすべてが露あわになってますね。とてもいやらしい光景ですよ」

初夏の朝日が、容赦なく私の身体を照らす。身に纏まとっているのは、乱れたベビードー
ルに、穴の空いた恥ずかしい下着。そして脚を大きく広げ、もつとも恥ずかしいところ

で彼のものをしつかり啜くえこんでいる。

誰が見てもいやらしい姿だ。たまらなくなつて、私は腕で自分の顔を隠す。すると、パツと両手首を彼に握にぎられ、阻止されてしまった。

「だめですよ。里衣、私との約束は？」

彼が言っている言葉の意味を理解して、私は困る。

「う、うう……」

「ほら……私が腰を動かすたび、ぐちゅぐちゅと愛液をこぼしてますよ。——私に言うことがあるでしょう？」

心底楽しそうに、ニッコリと微笑む葉月さん。同時に彼の眼鏡が朝日に反射して、きらりと光った。

おそらく私の身体は真っ赤になつてゐるのだろう。例えようもない羞恥しゅうちを感じながら、私は泣きそうな声で呟つぶやく。

「んっ………！ あ………っ、は、づきさん、と………っ、セックス………するの、が………あつ、きもち………いい………っ」

気持ちがいいこと、してほしいことは、すべて口に出して言わなければならない。それは葉月さんと最初にした約束だ。これを破ると、何をされるかわからない。

恥ちずかしくて俯うつむいていると、葉月さんがくすりと笑つた。そしてまたも腰を動かして

くる。

「可愛いことを言いますね。里衣は、私とのセックスが好きですか？」

「ああっ！ は………、あ、っ！ す、すき………っ！ ああ！ そこ………、んっ、グリッて………しないで！」

「こうされると気持ちいいでしょう？ さあ、この後はどうされたいのか、ちゃんと言つてください。あなたが望むままに、動いて差し上げますよ」

くすくす。葉月さんが楽しそうに目を細める。

対して私は、思い切り眉を下げて、恨めしげに「イジワル」と言うことしかできない。すると葉月さんの笑みが深くなり、ぴらりとベビードールをめくると、私の胸の尖とがりをチロリと舐なめてきた。

「ああっ!!」

「言わないのなら、好き勝手やりますよ？ あなたが壊れるまでね………フフ」

ちゅつと音を立てて頂いなかに吸いつき、舐なめる葉月さん。彼の腰が大きく引き、グリグリと勢いきよく奥を貫くいてくる。

「は………っ、ん！ あ………、や………んっ、壊こわさない………でっ！」

いっそ暴力的な快感に身を震わせながら首を横に振ると、今度は首筋にキスをされた。彼の舌はそのまま首筋を上がついていき、顎あごを伝つい、私の唇に口づける。そうしながら

も、葉月さんは熱く硬いもので膣壁を擦り、奥を突いた。さらに一度完全に抜いてから、時間をかけてジワジワと奥まで押し込んでくる。

ドロリと醜悪な甘さをもつ官能に、頭がクラクラした。それでも、彼の言葉を思い出す。彼が『壊す』と言えば、私は本当に壊されそうな気がする。

それは怖い。だから私は、恥ずかしくても望むことを言わなければならない。

私が今、望むもの。それは――

「っ、は、あ……。葉月、さん、奥……っ、もつと……激しく……あ、突いて……！」

「おや、まだセックスを覚えて間もないのに、早くも里衣は欲しがりになってしまいましたね」

「だっ……、て！ やあ、……っ、気持ちいい……からっ」

「ええ、私も気持ちがいいですよ。――里衣」

葉月さんは微笑むと、ぐい、と身を引き、勢いよく私の最奥まで貫く。ぐちゅ、とはしたない音がした。

「ああああ……っ！」

「……これが、欲しい？ 私のものが」

「っ、……。ん。はあ……。っ、ほし……。い……。っ。葉月さん……。すき……。っ」

早く、早くちょうだい。

何度も確認し、私に言わせようとする葉月さんに焦れて、私の腰が揺れる。葉月さんは嬉しそうに笑った。

「私も里衣が好きですよ。愛しています。もつともつと、愛したい」

ずちゅ、ぬちゅ、ぐちゅっ、ぬちゅっ。

ゆっくりだった挿挿がだんだん速くなる。葉月さんは私の身体を強く抱きしめ、勢いよく最奥を穿つ。卑猥な水音が絶え間なく鳴り響き、私の性感を駆り立ててくる。

「あっ、あっ、はっ、あ、あっ、ん！」

朝日が、私達の卑猥な絡みをしらじらと照らしている。

恥ずかしいけど、それでも、快感には抗えなかった。

「は、づき、さん、あ……。好き……。っ、キスも、す、好き……。っ！」

「ふふ、本当に壊したくなりますね」

グリグリと最奥に腰を擦りつけ、葉月さんは私の唇にキスをする。そのまま、パンパンと肌をぶつける、激しい挿挿が続けられた。

「あっ……。ん、ああ……。っ！」

お腹の奥から湧き上がる、不思議な感覚。勢いよく奥を貫かれた瞬間、私はビクビクと震えて、頂点に達してしまった。

「あああ……。っ、ん……。っ！」

「里衣、里衣。ああ、たまらない。——ッ！ あ、さと……いっ」
 葉月さんは私を一層強く抱きしめ、ピクリと身体を震わせる。彼もまた、達したのだ。そして息を整えて、余韻を楽しむように私の唇を何度も啄つばんでくる。

「はあ、これを抜くのが惜しいですねえ。もう一回しませんか？」

「し、しない……」

私はもうフラフラだ。掠かすれた声でなんとか答えると、ピンピンしている葉月さんが「ええ？」と漏もらし、口を尖とがらせた。

「まだ時間がありますし、もう一発ヤッておきましょうよ」

「ちよっと、言い方気をつけて!! 朝は忙しいし、疲れることはできるだけしたくないの! それにご飯も作りたいし」

「まだ余韻の残る胸を押さえながら言うと、葉月さんは「そうですね……」と残念そうに呟つぶやいた。しかし、すぐにニッコリして、人差し指をピンと立てる。

「では、夜なら連発しても構わないのですね？」

「れ、連発って……! だから、言い方考えてよ! ま、まあ、朝よりは……許せる、けど」

本当は何度もするのは恥ずかしい。しかしどうせするならば、忙しい朝よりはましかもしれない。すると葉月さんはニヤリと仄ほく暗く目を細めた。

「そうですね。つまり、夜なら何をしても構わないのですね」

「そう。朝じゃなければ、何をしても……、え？」

微妙に不安要素のある言葉に、目を見開く。

そのとたん、葉月さんは私の中から自身を引き出し、布団から出た。

「わかりました。では夜はいっぱいしましょうね。楽しみにしています」

「ま、待って、あの、普通のことするんだよね? 普通のことだよね?」

「ええ、至って普通のことですよ。私にとっては「葉月さんにとってはって、どういう意味!？」

恐ろしい言葉に、私もがばりと起き上がる。

「ははは。ほら、里衣。朝ご飯を作ってください。出勤時間に間に合わなくなってしまうですよ」

爽さわやかに笑った葉月さんは、シャワーを浴びるつもりなのか、浴室に続くドアを開けて入っていく。

ぼつんと残されたのは、布団を頭から被ったままの私。

えっと……これは、どういうことだろう。もしかして、割とんでもないことを許可したのではないだろうか。思わずブルッと身震いし、首を横に振る。

葉月さんがすることが、普通であるはずがない。しかし今さら嫌だと言っても、聞き

入れてもらえないだろう。

私は肩を落としてベッドから下り、着替えをして、コーヒーメーカーをセットする。そして冷蔵庫を開けると卵をふたつ取り出し、目玉焼きを作った。

今日は食パンがあるので洋風の朝食にしよう。食パンをトーストしてマーガリンを塗り、目玉焼きをのせ、塩を振る。ヨーグルトを小さなボウルに入れ、コーヒーと共にテーブルに置いてみると、シャワーを終えた葉月さんが浴室から出てきた。ワイシャツにダークスーツのスラックス姿だ。ネクタイを締めながら「おや、今日の朝ごはんは洋風ですね」と微笑み、席につく。

私はトーストがのった皿をテーブルに置いて、彼の向かい側に座った。そしてふたりで「いただきます」と手を合わせる。

葉月さんがトーストを食べはじめた。

私はマグカップを持ち、そんな彼をジッと見つめた。

「美味しいですね」

幸せそうな笑顔で葉月さんが褒めてくれる。私の心はふわっと温かくなった。

彼は変態で意地悪で、酷いことだつてするのに、私はこんなことですぐ幸せを感じてしまう。

……私はかなり、単純なのかもしれない。

葉月さんは朝食を終えると、早々に出かけてしまった。

私は軽くシャワーを浴びたあと、居住スペースの下——二階の事務所に下りて、ブラインドを上げて窓を開ける。頬に触れる、生暖かい空気。春に比べると幾分か爽やかさが足りなくて、初夏らしい蒸し暑さを感じた。

私はいつも、仕事の前に掃除をする。もくもくと掃除をしていて、ふと、次の資源ゴミの日はいつだったけ、と壁にかかったカレンダーを見た。

今日は、六月の第一週だから……。あれ、もう六月……？

「あっ!!」

誰もいない事務所に、私の大きな声が響く。そうだ、六月といえば大切な日があったのだ。

「なんで忘れていたんだろう。葉月さんのせいだ、まったく」

ブツブツと文句を言う。葉月さんと出会ってから非日常的な日々でいっぱいいっぱいになって、大切なことをすっかり忘れていたのだ。

六月十七日には、おじいちゃんの三回忌がある。まだ日数に余裕はあるけど、悠長ゆうちやうにしてられない。

「法要のお知らせは結構前に出してあるけど、仕出しの予約をしなきゃ。葉月さん、外

出許してくれるかなあ……」

ダメだと言われても、どうにかして説得するしかない。法要の施主は私だ。なんとしても出席しなくてはいけない。

今日は四人の所員も揃って外仕事らしく、私は事務所でひとりハラハラした気分です。事をはじめるとして三時を回った頃、ドカドカと複数の足音が聞こえてきた。どうやら、みんなが帰ってきたらしい。

そうだ、昨日作ったお菓子がある。これを出して、ちょっと休憩しよう。

そう思った時、ガチャリと事務所のドアが開く。私は書類を片付けながら振り向いた。「おかえりなさい——」

出迎えの挨拶を口にして、途中で固まった。入り口に立つ葉月さん達の姿を見て、あつげにとられたのだ。

何があったら、こんなにボロボロヨレヨレになるの!?

葉月さん達五人組は、揃いも揃って服が破れたりあちこち傷だらけだったりという恰好だった。

「い、一体何をしてきたの!? みんな、仕事してたんじゃなかったの!？」

私が慌てて駆け寄ると、葉月さんはズレた眼鏡を直して、はははと笑う。

「いや、私達は真面目にお仕事していたのですがね、向こうが一方的に喧嘩を売ってき

まして」

「一方的にとって……」

葉月さんの高そうな眼鏡は斜めに歪んで、目元に痛々しい青痣ができています。いつもはパリッとしているブラックスーツは、泥や土で汚れていた。

彼の後ろにいるのは、スキンヘッドに蛇骨の刺青が入った強面の男性、桐谷さん。彼の頬には大きな傷があり、シャツが破れている。

曾我さんは、いつもかけているサングラスが割れていて、髪の毛は濡れていた。トリードマークのアロハシャツは、汚れているけれど無事のように。

ホスト風の服装で茶髪の黒部さんは、顔を殴られたらしい。口元が切れて血が出ている。

無口な滝澤さんは、灰色のパーカーのフードを、いつも通り目深に被っている。そのせいで怪我の具合はわからないけど、パーカーは血痕と土埃でどろどろになっていた。

私はわたわたとあたりを見回す。

「と、とにかく手当てしなきゃ。血も出てるし。掃除をした時に見なかったけど、この事務所って救急箱とかあるの?」

「救急箱?」

首をかしげたのは桐谷さん。曾我さんは、眉根を寄せて思案顔だ。

「あー、なんか奥のほうにあった気がする、ような？」

「前に桐谷さんが、『怪我しても、自分で縫えは医療費いらねえな』とか言って、裁縫箱買いませんでした？ その治療をしている時、救急箱っぽいのも見た気がするっス」

黒部さんの言葉に、葉月さんが楽しそうに笑う。

「ああ、そんなことありましたねえ。結局、綿糸で縫った後に傷が化膿して病院に行って、医者に怒られたんですよね、あはは」

ほがらかな声で会話が飛び交うが、内容はまったく笑えるものではない。ふつう、人の肌は縫い針で縫わない。というか、桐谷さん……まさか、自分で縫ったの？

想像するだけでぞわぞわと怖気が走る。私はそれを振り払うように首を横に振って、資料室に向かう。この事務所で『奥』と言えば、大抵この資料室のことだ。

そこは、乱雑にまとめられた書類や段ボール箱が山積みになっている、別名なんでも倉庫。所員の性格が見て取れるほど、雑然としている。

そのうちこも片付けようと思いつつ、あちこちの段ボール箱を開ける。しばらくして、ガラクタの中から救急箱を見つけ出した。

救急箱を持って戻ったら、みんなは思い思いに疲れを癒していた。

私が救急箱を開けて中身を確かめっていると、コーヒーを飲んでいた葉月さんは「ああ」と思い出したように声を上げた。

「里衣。手当てをしてもらえらるなら、先に滝澤をお願いできますか？ そもそも滝澤が最初に絡まれてしまったので、一番怪我が酷いのですよ」

「あ、はい。わかりました」

滝澤さんは事務所の隅っこで体育座りをして、黙ってスマートフォンを弄っている。私は彼に近づいてしゃがみ、「あの……」と声をかけた。

「滝澤さん、傷の手当てをしたいのですけど。パーカーを脱いでもらえますか？」

滝澤さんは手を止め、ゆるく顔を上げる。フードと長い前髪のせいで、やっぱりほとんど顔が見えない。彼は少し億劫そうに、灰色の長袖パーカーを脱ぎはじめた。

さすがにパーカーを脱げば、顔つきがわかるはず。彼はどんな顔をしているのだろう。滝澤さんの顔をはじめ見るから、妙にドキドキしてしまう。

しかし、彼がパーカーを脱ぎ終わった時点で、顔つきが気になっていたことなんて忘れてしまった。私は大きく目を見開く。

——半袖シャツを着た彼の身体は、見えているところすべてが古傷だらけだったのだ。「ちよつ、あの、た、滝澤さん」

声が上がってしまふ。だけど滝澤さんは何も言わず、ただ頭のあたりを指さした。

見れば、側頭部が血で汚れている。私は慌てて救急箱からガーゼを出し、彼の長い黒髪をかき分けて傷口を確認した。大きなものではなく出血量も多くないが、かなり痛そ

うだ。

「こ、これは、硬いもので叩かれたりしたんですか?」

「角材」

「角材……って、木!? えっと、頭がぐらぐらしてるとか、気持ち悪いとかないですか?」

「ない」

短く答える滝澤さん。よく見れば髪が少し濡れていた。

「傷口は洗ったんですね」

「公園の水で」

ひとまず、何枚か重ねたガーゼを当て、ぐるぐると包帯で巻く。

「えっと、他に怪我してるところはありませんか?」

「腕と、脚。首」

そう言いながら、滝澤さんはズボンの裾やシャツをめくる。そこを見れば、たしかに裂傷があった。

それらも一度洗ってあることを確認すると、頭の怪我と同じように処置を施した。血はまだ出ているけれど、出血量は多くない。しばらくしたら治りそうだ。よかったとホッとする。

しかし私は、滝澤さんの古傷を見ていられなかった。

腕も脚も首も、見えるところは全部傷だらけ。特に腕には大きな火傷の痕が残っていて、首や脚には縫った痕がいくつもある。どの傷も痛々しい。

もしかして滝澤さんがずっと長袖のパーカーを着て、フードを被っているのは、これが理由なのだろうか。傷を見られたくないから?

処置を終えたからか、滝澤さんは血痕で汚れた灰色パーカーに袖を通し始める。

「あ、あの、そのパーカーすごく汚れてるから、洗濯しましょうか?」

滝澤さんは、ぴたりと動きを止めた。

「今すぐ洗濯して乾燥機にかけたら、夕方には乾きますよ」

無言のまま数秒固まったのち、彼はパーカーを私に渡してくれる。あまり喋らないけど、私の言葉を聞いてくれたから嬉しくなった。

「あ、里衣ちゃん。洗濯するなら俺のもお願いー」

「俺も!」

曾我さんと黒部さんの声とともに、ばさばさと服が飛んでくる。私の頭にのっかったそれを手に取ると、曾我さんのアロハシャツと白いカットソー、それから黒部さんのワイシャツと血で汚れたネクタイだった。

汗のにおいがあるそれらを抱え、はあとため息をつく。これでは事務員というより

寮母さんみたいだ。

「みんな、傷の手当てはいいんですか？」

振り返ると、曾我さんと黒部さんは上半身が真っ裸である。慌てて目を逸らす私に、「俺はいい」と桐谷さんの声が飛んできた。

「俺は口を怪我しただけだし、大丈夫だよー」

「俺も大丈夫」

「私は後でゆっくり里衣に見てもらいますから」

軽い口調の黒部さんと曾我さんに、穏やかな葉月さん。『後でゆっくり』ってなんだ。また変なことをするつもりじゃないだろうな。頼むから怪我してる時くらい大人しくしてほしい。

私は洗濯物を持って三階へ上がり、服についた血を洗い流してから洗濯機に放り込む。そして洗濯待ちの間に事務所へ戻ると、みんなはまだ思い思いの場所でぐったりしていた。喧嘩で相当疲れたらしい。

そうだ、あのお菓子をあげたら、みんな喜ぶかも。

私は事務所の冷蔵庫に入れておいたお菓子——マカロンを取り出した。前に葉月さんから、滝澤さんがマカロンを食べたがっていると聞いたのだ。マカロンはコツを掴んでいないと、艶のある表面に焼き上がらない。私は何度かこっそり練習して、昨日よう

やく納得いくものを焼き上げることに成功した。

「あの、マカロンを作ったんです。よかつたら食べてください」

お皿にこんもりと盛った、バステルカラーのマカロン。コトンと応接セットのテーブルに置くと、事務所の端に座っていた滝澤さんの目が光り、駿足でテーブルに近寄ってきた。そして、マカロンを目の前にしてジッと待つ。桐谷さんが無言でマカロンをふたつ手に取ると、滝澤さんは五つ両手に取って、事務所の端でマカロンを食べはじめた。

滝澤さんは必ず甘党仲間の桐谷さんを優先してから、自分の分を取る。それは滝澤さんが、このメンバーの中で一番後輩だかららしい。

桐谷さんがさっそくマカロンを口にする。彼は、スキンヘッドに蛇骨の刺青を入れていて、身体も大きく、非常に目つきの悪い男だ。可愛いマカロンとはミスマッチだが、そんなことは口が裂けても言えない。

まあ、部屋の隅っこで膝を抱えて、黙々とマカロンを頬張る傷だらけの男も、どうかと思うけど……

そんなふたりの後に、曾我さんと黒部さんがひとつずつマカロンを掴まんだ。

「うまつ！ マカロンってこんなに美味しいんだ。挟んであるクリーム、生クリームとは違うね」

「それはホワイトチョコレートのガナッシュですよ。ラズベリーブランデーで香りづけ

もしています」

嬉しそうに食べる曾我さんに説明しながら、小皿にマカロンを三つのせて、葉月さんのデスクに持っていく。

「はい。これは葉月さんの分だよ。三つで足りる？」

「ええ。ありがとうございます。……ん、マカロンを食べるのははじめてですが、確かに美味しいです。やっぱり、里衣は料理上手ですねえ」

ニコニコしながらマカロンを食べる葉月さんに、思わず照れてしまう。彼はいつも、私のなんでもないと顔を褒めてくれるのだ。

「滝澤はいつもマカロンを食いたそーにしてたんだ。でも、洋菓子屋に入る勇気が出なかったみたいだからさ。里衣に作ってもらってよかったなあ」

黒部さんが滝澤さんに声をかける。すると滝澤さんは無言ながらも大きく頷いた。

喜んでもらえたなら、何よりだ。私もマカロンをふたつ取って、自分のデスクで食べはじめた。

曾我さんはききこきと首を鳴らしてコーヒーを飲むと、ふうーっと息を吐く。

「いやー。ほんとびっくりしたよ。滝澤の連絡待ちしてたんだけど、全然電話が来なくてさ。気になって探してみたら、六人くらいと喧嘩してんの。『何やってんだ！』って、思わず怒鳴っちゃった」

「そ、そりや怒りますよね。六対一なんて、明らかに卑怯ですし……」

「え？ 違うよ。滝澤に怒ったんだよ。『なんで俺を呼ばねえんだ』って。喧嘩なんて楽しいイベント、独り占めするのはずるいだろ！」

よろりと身体が傾く。彼の発言は、私と価値観が違いすぎる。こういうところで、やっぱり彼らはヤクザなんだなあと再認識する。

「じゃあ、他のみんなも、喧嘩したくて滝澤さんに加勢したんですか？」

「そうそう。スマホで知らせたら、みんな飛んできてさ。すっげー面白かったぜ。相手も四人くらい新たに呼んでさあ。でも、住宅街の公園で喧嘩してたから、近くの住民が警察呼んじゃって。逃げてきたってわけ。殴り合いよりもサツから逃げるほうが疲れたよ」

「相手は用意がよかったっすよね。バンで来てたし。逃げるのもびっくりするくらい速かったっす」

黒部さんの言葉に、葉月さんも頷く。

「それに比べて私達は徒歩でしたからねえ。車から走って逃げるのって、結構疲れるんですよね」

あはは、とコーヒーを飲みながら軽く笑う葉月さん。ツッコミどころが多すぎるが、私はすべてスルーして、話を元に戻す。

「それにしても滝澤さん一人に対して六人がかりだなんて酷いですよ。一体どうして喧嘩なんてことになったんですか？ 向こうに絡まれたんですよね？」

ヤクザと言っても、理由もなく喧嘩を売られることはないと思う。いや、ヤクザの世界では、本当に挨拶がわりに喧嘩をするのだろうか？ なんにしても物騒だなあと憤然としていると、コーヒーに角砂糖を入れていた桐谷さんが呆れた視線を向けてきた。

「お前が原因なんだよ。里衣」

「えっ、わ、私、ですか？」

知らない間に、何かやらかしてしまったのだろうか。私が慌てっていると、葉月さんはニッコリと微笑んだ。

「最近、あなたのおかげで仕事が増えていましてね。それを同業者がやつかんだのですよ。たまたま滝澤は運よく——いや、運悪く、絡まれてしまったのですね」

「私のおかげで仕事が増えたって……どういうことですか？」

首をかしげると、応接セットのソファに座っていた黒部さんが背もたれ部分に肘をつき、指をふりふりと振る。

「里衣の接客やお礼状が功を奏したんだよ。口コミを聞いて、うちに依頼してくるお客さんが最近増えてさ。それを面白くないと思った奴らがいたんだ」

「うちと同じような仕事をしてる興信所が、『勝手に客取るんじゃないよ』って喧嘩

売ってきたってわけ。依頼する興信所を選ぶのはお客さんだから、俺らに文句を言っても意味ないんだけど、そんなの通じないんだよね」

だから拳で殴り合うしかないんだよ、と曾我さんが笑う。

……まさか、そんな理由で殴り合いになったとは。自分の様々な工夫が結果を出したのは嬉しいけれど、なんだか諸手を挙げては喜べない。

「うーん、じゃあやつぱり、私が原因で絡まれてしまったんですね。ごめんなさい、滝澤さん」

謝りつつも、これからどうしようかと悩んでしまふ。

すると、滝澤さんはぶるぶると首を振った。

「面倒だけど、喧嘩は嫌いじゃない」

「むしろ滝澤は怪我すればするほどハイになるっつうか、自分の血が流れるの、大好きだもんね」

曾我さんの言葉に滝澤さんがコクコクと頷く。

「自分の血が好き？ その、こう言うのも変ですけど、他人の血じゃなくて、ですか？」

「他人なんて、殴ったら簡単に血が出るだろ」

滝澤さんは淡々と言うが、あまり理解できない。深く考えると頭がおかしくなりそうだったので、考えないことにした。ここにいる所員全員、喧嘩が大好き。それでいいか。

——あつ。そういえば、私は葉月さんに言わなければならぬことがあったのだ。今日はもう仕事にならなそうだし、今言ってもいいだろう。

「あの、は、葉月さん。私、さ来週の週末から数日ほど、外出したいのだけど……」

「数日——つまり、泊まりということですか？ 理由を聞いてもよろしいですか？」

ぴりっとした様子で聞いてくる葉月さん。私は指をまごつかせながら、ぼそりと答える。

「おじいちゃんの三回忌なの。だから、田舎いなかに帰らないといけなくて」

「三回忌。……なるほど、おじいちゃん、ですか」

ふむ、と顎あごに指を添えて、葉月さんは考えこむ。そして数秒後、「わかりました」と微笑んだ。

「構いせんよ」

「本当!? よかった! もうお手紙とかは出してあるけど、仕出し弁当を注文したり、お墓の掃除やお寺に挨拶あいさつに行ったりしなくちゃいけないの。まあ、参加する人は去年の一周忌と同じだから、そんなに大したことはしないけどね」

「ということは、里衣が施主を務めるのですか？」

「そうだよ」

「珍しいですね。普通はあなたの親がするものだと思うのですが？」

軽く首をかしげられ、思わず俯うつむいてしまう。

確かに、親のほうが施主にふさわしい。だけど私の家族においては、そうではなかった。

「おじいちゃんは母方の祖父だから、本来は母が施主を務めるものだと思う。でも、母は私が生まれてすぐにすべての権利を……財産分与も放棄していて、今はもう他人みたいなものなんだよ」

「財産分与まで辞退したのですか。失礼ですが、おじいさんに借金があったのですか？」

「借金はないけど、財産と呼べるほどのものがあつたわけでもないよ。山をひとつ、所有していたくらいかな」

「山なんてすごいじゃん。立派な財産だと思うけど？ お母サンもつたいないなあ」

黒部さんがソファから茶々を入れてくる。そんな彼に少し笑って、大したことはないよと首を振った。

「山から得た利益は、その山自体の管理費や田舎いなかの家の維持費をギリギリ賄まかえるくらい。ほとんどお金になってないんです」

「へ、じゃあ……おじいさんが亡くなつた今、その山の持ち主は、里衣ちゃんってこと？」

曾我さんも話にノッてくる。

「ええ。祖母は早くに亡くなり、母は一人っ子で、私も一人っ子。つまり、私しか財産を継ぐ人間がいなかったんです」

「マジか。もしかして里衣ちゃんって資産家？」

「いいえ、全然。祖父はほとんど貯金がなかったし、残されたものはお葬式の費用と、家と、山。家はとても古くて、山もそれほど大きくないんです。昔から用水路に流している山水があるくらいですね」

利益と呼べるようなものはわずかしがなく、そのお金は管理費と維持費に消えていた。山を管理するには決して少なくないお金がかかるけれど、だからといって、管理しないと荒れ放題になってしまう。山にはある程度、人の手による手入れが必要なのだ。だから現在は、田舎いなかの業者に頼んで山の世話をしてもらっている。

「でもさあ、お母さんが財産分与を辞退したのはわかったけど、里衣ちゃんが施主を務めるのとは関係なくない？ 死んでたらともかく、生きてるなら、ふつう、お母さんが施主をするものだと思うけど」

再び首をかしげる曾我さんに、私は苦笑いをする。

「……母はもう、私やおじいちゃん、他人になりたいんです」

私を産んだという過去を、彼女はなかったことにしたいのだ。彼女は赤子だった私を捨て、新しい生活を手に入れている。今は新しい夫と新しい子供に囲まれ、とても幸せ

な日々を送っている……らしいから。

彼女にとって、私は人生の汚点である。母はそんな私を自分の父親に押しつけた。そして私達と顔を合わせたくなくて、母はずっと昔に財産分与を辞退したらしい。祖父の葬式の日ですら、私と言葉を交わしたのは一言二言という有様だった。

その時、私は心の底から母を他人なのだと思い、祖父の残したすべては私が守ろうと心に誓ったのだった。

それからしばらくして、田舎いなかに帰省する日がやってきた。

それなのに、葉月さんは以前私が逃げないようにと取り上げた荷物を返してくれなくて、困っていた。しかし、ようやく今日になって、葉月さんは私にあるモノを返してくれたのだ。

それは、キャッシュカード！ 法事のためにお金が必要だろう、ということらしい。

ただし、帰省時の期間限定で、事務所に帰ってきたら葉月さんに再び預けることになる。

そしてなんと、葉月さんが私にワンピースを買ってくれた。私が元から持っていた私服は没収されていて、今は事務服とコスプレ服しか持っていないから、本当に嬉しい。

私はるるん気分で寝間着のベビードールを脱ぎ、新しい匂いのするワンピースに袖を通した。

「ああ、とても可愛いですよ、里衣。フォーマルでもフレアスカートを選んで正解でしたね。法要の際には真珠のネックレスもお渡ししますから、きつとそれも似合うと思いますよ」

「あ、ありがとう葉月さん。こんなの買って……。でも、私の持ち物の中にフォーマル服があるはずなんですけどね」

さりげなく私物のことを話題に出してみるが、葉月さんはまるっと流して私に近づく。そして前からぎゅうと抱きしめると、私の髪のおいを嗅ぐように、頭頂部に鼻をこすりつけてきた。

「コスプレ衣装もいいですが、たまにはきちっとした服もいいですね。ビジネススーツにも似た魅力を感じますよ」

「む、むう……。その、むやみにくつつかないでほしいのだけど」

「今更でしょう？　しかしなんと言っても最大のポイントは、こんなにフォーマルな装いなのに、中身がガーターベルトの黒ストッキングというところですね。しかも下着は……うん、さすが里衣、わかっていますね。ここで黒のレースを選ぶなんて。なんだかいろいろしたくなってしまうですよ」

「いろいろしないで!？」

当たり前のように私のスカートをめくって、下着の色を確かめる変態葉月さん。彼の胸を両手で押すと、彼はあっさりと私を解放した。

「さて、里衣。このスーツケースに着替えや必要なものを入れておきましたので、確認してもらえますか？　足りないものがあつたら言ってください」

「ごとんと渡される黒いスーツケース。こんなものを用意していたなんて知らなかった。さつそく中を確かめてみると、私の着替えや下着が袋で分けられて、綺麗に収まっていた。ちなみに着替えは新品の普段着だ。——だから葉月さん、わざわざ新しい服を買わなくても、私の荷物を返してくれたらそれでいいのですけど……」

「うわ、ハブラシセットまであるし、洗顔料まで新品だ。シャンプーにリンス、ボディソープ……」

「こんなに用意してもらわなくても、田舎の家には一通り揃っている。本当に葉月さんは変なところだまめだ。」

「バスタオル、ハンドタオル……ん、これは男性用の下着に……ネクタイ？　なんでこんな男物がまじっているの？」

「スーツケースの中から黒いネクタイをぴろんと出す。すると葉月さんは、なんてことない様子で答えた。」

「もちろん、私も同行するからですよ」

「へえ………同行。………どうこう!？」

くわっと目を見開く。同行って、私についてくる気なのか。なぜだ。いやそれよりも、 magari なりに社長が、数日も事務所をあけていいのだろうか。

「は、葉月さん。私はひとりで大丈夫だよ。もう、逃げたりしないから、用事が終わったら帰ってくるよ」

「ええ。もちろん、私の里衣はちゃんここに帰ってくると、わかっていますよ」

ニッコリと、葉月さんが手を握ってくる。

「ならどうして？ こう言ってはなんだけど、実家には何も無いよ。田舎だし、特に観光地があるわけでもないし」

「別に観光目的ではありません。単にあなたの故郷が見てみたいだけですよ」

「見てみたいって……。そんな理由で事務所をあけていいの？ 会社は？」

「私が数日留守にしたくらいで仕事が回らなくなるほど、うちの所員は無能ではありませんよ。それに、しばらく休暇を取っていなかったたので、いい機会なんです。ホラ、上が休みを取らないと、下が取りづらいでしょ？」

取ってつけたような理由だが、大丈夫だと言うなら私に言えることはもうない。かくして私は、葉月さんと一緒に田舎へ帰ることになったのだ。

事務所のある街から車でおよそ四時間半。とある山間にある小さな村が、私の住んで

いた田舎だ。

前回田舎に帰った時は春のお彼岸だったから、三ヶ月弱ぶりになるのか。あの頃はまさか、自分がヤクザの男性とつきあうことになるとは、思いもしなかった。

村に入って見慣れた風景を懐かしんでいると、運転席でハンドルを握る葉月さんが私に声をかける。

「そろそろ里衣の家が見えてくる頃ですか？」

いつものブラックスーツ姿で、こうやってスマートに運転している姿を見ると、改めて恰好いなあと思ってしまう。シャープな印象を持つメタルフレームの眼鏡も似合っていて、一見仕事のできる真面目なサラリーマンにも見えた。

「その角を曲がったらすぐだよ。その、大きな松の木があるところ。葉ぶきの古い家」

指を差して教えてると、葉月さんは頷き、ウチの敷地内に入っていく。玄関の前で車を停め、エンジンを切った。

車から出て、久々の実家を見る。平屋建ての藁ぶき屋根。やや朽ちた感のある古い外壁に、少し荒れた庭。思い出がたくさん詰まった、私の帰る場所。

葉月さんも車から降りて、私の隣に並ぶ。

「この家で里衣は育ったんですね。なるほど、なんとなくあなたの人となり理解でき

る家です」

「人となりって、どんな？」

「お人好しで世間知らず、素朴で善人なところでしようかね？」

そう笑われて、思わずムスツとしてしまった。素朴で善人はともかく、お人好しで世間知らずって、褒め言葉じゃないと思うのだけど。

「しかしここまで古い家屋とは思いませんでしたね。藁ぶき屋根なんて、珍しいのでは？」

「うん。このあたりでも藁ぶき屋根の家はウチくらいかな。なんでも曾祖父の代で建てた家なんだって。中もかなり古いよ？」

軽く笑って玄関の鍵を開ける。ちなみにこの鍵も、葉月さんがずっと預かっており、今日やっと返してもらったのだ。

玄関扉は少し立て付けの悪い木製の引き戸で、錠も門に南京錠という時代錯誤な造りだ。中に入ると、葉月さんが感心したように「ほお」と声を上げる。

「土間ですか。風情有りますね」

「夏は涼しくていいんだけどね。冬は寒くて……。土間の先に、囲炉裏のある畳部屋が見えるでしょ。そこが居間だよ」

玄関をくぐると灰色のコンクリート床が続く土間が広がっており、角にはコンロとタ

イル張りのシンク、そしてかまどがある。かまどは大昔には使われていたのだが、私がここに預けられた頃にはすでにガスコンロがついていて、かまどを使うことは滅多になかった。

私が靴を脱いで土間から座敷に上がると、葉月さんも革靴を脱いでスーツケースを片手についてくる。家を案内しながら、とりあえず私の部屋に向かう。

「この廊下を逆方向にまっすぐ行くと、トイレとかお風呂とか洗面所があるの。葉月さんはおじいちゃんの部屋使う？」

「いいえ、私は寂しがり屋さんなので、里衣と同じ部屋にします」

大の大人が自分のことを『寂しがり屋さん』なんて言うのは、いかがなものか。そう思ったが、あえて何も言わずに自分の部屋に向かう。

少し茶色く変色した古いふすまを開けると、久しぶりに自分の部屋が迎えてくれた。小学生の頃から使っている学習机。小さい頃にぺたぺたと貼ってしまったシール跡が残るカラーボックス。懐かしい匂いが色濃く残る、慣れ親しんだ部屋。

空気を通すために窓を開けていると、物珍しそうに室内を見渡していた葉月さんが「ふふ」と軽く笑った。

「どうしたの？」

「いえ。本当に里衣らしい部屋だなあと思いました。すべてが普通と言いますか……。

里衣はおじいさんに大事にされて育ったのですね」

しみじみと言う葉月さんに首をかしげる。私らしい部屋とは、どういうことだろう？
あと、普通というのもよくわからない。だけど、おじいちゃんに大事にされていたのは
当たっているので、こくりと頷いた。

「私には物心つく前から両親がいなかったけど、おじいちゃんが親代わりになってくれ
たからね」

「親代わり。……そんな方を亡くして、とても悲しかったでしょうに。まだ二年しか
経っていない中、よく都会に出て、ひとりでがんばってましたね」

えらいですよ、と頭を撫でてくれる葉月さん。私は困って苦笑いをしてしまう。

「そんなことないよ。むしろ私は、がんばれなかったからここを出たの。……山や家の
管理とか、本当はこの家に住みながら自分でやらなきゃいけないかった。でも私は、耐え
られなかったんだよ」

ふ、と視線を落とす。葉月さんは黙って頷き、続きを促した。

「おじいちゃんのいないこの家に、ひとりですみ続けるのがつらかったの。だから私は、
業者に山の維持管理を頼んで、この村を出た。ひとりで、だれも私を知らないところで
生きるほうが、楽だと思っただから」

自分の部屋から窓の外を見ると、そこには小さな庭がある。

すっかり土が硬くなって荒廃感が出ているが、以前は畑だった。おじいちゃんと私が
ふたりで食べていけるくらい野菜を育てていた。

この家には、あらゆる思い出が染みついている。柱の傷、ふすまに残る小さな落書き。
すべてにおじいちゃんとの思い出が詰まっている。

そんな場所ですら、孤独に生活するのが、耐えられなかった。私は、とても弱かつ
たのだ。

「法要とかいろいろあるから、結局、数ヶ月に一度帰ってきているんだけどね。……な
んか、まだ、ここにちゃんと帰る勇気が出ないんだ」

窓に手をつきながら小さく呟く。

すると頭に大きな手がふわりとのつた。……それは、葉月さんの温かい手。

「里衣は強いですよ」

「……え？」

「完全に逃げることも、忘れることもせず、定期的にここへ戻っている。それは、里衣
が強いからですよ。あなたはきちんとおじいさんの死を受け入れている。前を向いて進
んでいるからこそ、帰ることができるのですからね」

彼は私の頭を撫でてから肩に手を置き、優しくこめかみに口づけてくる。

「前々から芯のある女性だと思っていました。ここで再認識しましたよ。肝が据わっ

ているのも度胸があるのも、すべてはこの家とおじいさんがあなたを育ててくれたからなのですね」

ニッコリと微笑み、共に窓からの景色を眺める。

……おじいちゃんが亡くなってからずっと、ひとりでこの家に帰っていた。寂しいのは当たり前だと受け入れ、掃除をして、時には施主を務める。すべてが終わったら、鍵をかけて数カ月は留守にした。

それを当然のように受け入れていたけれど、今こうやって隣に葉月さんがいるのが——ひとりではないことが、少しくすぐったくて、嬉しい。

一緒に来ると言われた時こそ驚いたけれど、今、この家にいるのは私ひとりじゃない。……それは不思議と、心に温かさをもたらした。

スーツケースを部屋に置いて、次に広間に向かうと、少しカビっぽいツンとした匂いが鼻につく。長い間家を空けていた独特のにおいだ。

木製の雨戸と窓を開けて、部屋に空気を通す。

広間の端にある仏壇を開けると、中にはおじいちゃんとおばあちゃんの写真立てが入っている。それを手に取り、床の間の飾り棚にコトンと立てかけた。

「おじいちゃん、おばあちゃん。ただいま」

おじいちゃんは、写真立ての中でむすっとした顔をしている。おじいちゃんは笑うのが苦手だけど、とても優しく、時々厳しい人だった。

私は仏壇の前に正座すると、線香に火をつけて立てる。そしてお鈴を鳴らし、手を合わせた。

手を下ろして場所を空けると、葉月さんも仏壇の前で正座をし、線香を立ててくれた。

「ありがとうございます」

「いいえ。それで里衣、これからどうします?」

「あ、うん。今日は山の管理をしてもらってる人のところへ挨拶に行くの。法要の打ち合わせもしたいからね」

事前に連絡してある。午後の二時頃なら家にいるそうだから、そろそろ行ったほうがいいだろう。

「あとは山を少し見ておきたいな」

「では、挨拶の前に、車で山に寄りましょうか」

葉月さんの提案に「そうだね」と頷く。さっそく私達は家を出て、葉月さんの車に乗り込んだ。

「ここから山までどれくらいかかるのでしょうか」

「車なら五分くらいかな。山間の村だから、すごく近いんだよね」